

海津一朗編

『中世都市根来寺と紀州惣国』

(同成社中世史選書 13)

同成社 二〇一三・六刊

A5 三六〇頁 七三〇〇円

まず本著の帯に着目した。「アジア海域世界にネットワークをもつ根来惣国の首都、中世根来寺の風景を解明する」とある。「惣国の首都」とは、いったい何か。根来寺の支配領域＝惣国、その首都のことと解かれている(八頁)。

根来寺については、根来衆といわれた僧兵らが武力をもって守護方勢力を排撃、戦国期には鉄炮を生産し、信長軍団に与したが、秀吉の紀州攻めによって壊滅したと、一般に説明される。だが、本著の地平は、百姓の持ちたる惣国の首都から、アジアの海域世界へと広がっている。

次いで本著の章立てをみよう。序章、I首都の周縁、II首都の中核、III根来惣国の世界、IV史料編、付録。このように構成され、全十一章をもって論説されている。本著は、序章で触れられているように、科研費補助金研究成果報告書『中世根来の社会史』(和歌山大学教育学部海津研究室、二〇〇八年)を土台とし、より豊富な調査及び研究成果情報を提供している。

そこで、内容を簡単に紹介しながら、本著の意義について述べておきたい。

序章「研究史のなかの根来」の第四節「本書の構成」の(図1)に示された通り(一一頁)、根来寺の寺内とその境界領域(施設遺構群)、坂本の都市集落、弘田庄、根来惣国、倭寇世界とその拠点(イリヤ・ドス・ラドロイス＝盗賊島)といった構造概念が指摘されている。そして、このような都市構造や境界概念を創出し得た関係論文が、本著に収載されている。

Iの第一章～第三章とIIの第四章～第七章は考古学の発掘成果を基盤とするもの。IIIは主に文献研究の成果だが、なお両者の協働研究が成功している点に意義がある。

すなわち、大湯屋(温室)と根来寺の成立、『根来寺伽藍古絵図』(以下『絵図』)と大門池の結界性の復元、土塁や帯曲輪・空堀で構成された要害寺院址、『根来要書』と『絵図』による根来寺伽藍(二四頁の図1、一三四頁の図2)と、その景観および組織。宗祖覚鑠ゆかりの大伝法院伽藍の歴史的な変遷、学侶方(学僧衆)の寺院建築構造の復元、紀州惣国と根来寺、根来寺行人方(雑役・俗事にかかわる下級僧衆)の信仰と軍事、根来惣国の境界、根来の山伏修験等々。論点は多岐にわたるが、いずれも中世都市(根来)に収斂されている。研究史上、中世宗教都市の多様性の観点から興味は尽きない。

IV史料編は、史料の解説「根来寺史料について」があつて丁寧な説明と文献研究上の今後の課題が整理されている。秀吉の焼討ちで焼失した膨大な古文書類を補うところの「佐武伊賀働書」、近世の覚書や家譜、またそこに収載された中世文書の写など、二次的な史料の価値があらためて指摘されている点は重要である。

本著は、豊富な図版・表・文献を活用し、精緻に論説されている点特徴的である。かかる総合研究としての成果は、〈根来〉に関し、「山の寺」（山岳宗教都市）と捉え直し、また「惣国の首都」と読み解きながら、考古・歴史地理・建築史・文献史の学際的な協働研究によって再構築したところにある。

さらに本著は、歴史文化遺産としての価値を評価するための方法と認識に関する、新たな指標となるであろう。今後の保存、指定のあり方に反映され、従来の策定方針に再考を促すことのできるものと思われる。

（鍛代敏雄）